文部科学省
地(知)の拠点

平和社会を育む　ひろしまイニシアティブ拠点

広島大学　地(知)の拠点中山間地域・島しょ部対策領域

第3回円卓フォーラム成果報告書

平成29年1月19日開催

目　　次

第３回円卓フォーラムの成果報告にあたって　２

Ⅰ 第３回円卓フォーラムの概要　３

Ⅱ　１部：体験型教育プログラムの成果と評価
教養ゼミによる体験学習の成果　５
冨永ゼミからの報告　６
船戸ゼミからの報告　６
棚田の井仁地区におけるインターンシップ　７

安芸太田町井仁地区イニピチュ会のプログラム　８
河川漁業の大切さを伝えた太田川漁業協同組合　１０
自治体と地域の視点から：大崎上島町役場と海藻塾　１１
自治体の視点から：世羅町役場産業振興課の取組　１２
自治体の視点から：三次市役所企画調整課の取組　１４

Ⅲ　２部：市町、地域、学生、教職員によるワークショップ
ワークショップの進め方　１６
各グループからの報告・まとめ　１７

フォーラム討論の総括　２０

Ⅳ　資料
円卓フォーラム出席者　２３
円卓フォーラム報告資料
地域とともに作り上げた活動の概要と成果　２４
冨永ゼミ（学生）報告資料　２７
船戸ゼミ（学生）報告資料　２９
インターンシップ（学生）報告資料　３１

安芸太田町井仁地域報告資料　３３
世羅町報告資料　３５
三次市報告資料　３７

第３回円卓フォーラムの成果報告にあたって

広島大学 生物生産学部長 吉 村 幸 則

広島大学では、平成 25 年度に「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」事業が、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択されました。この事業には、①平和発信、②障がい者支援、③中山間地域・島しょ部対策〈条件不利地域対策〉、の３つの領域が設定されています。生物生産学部は、「中山間地域・島しょ部対策」領域について、その教育・研究活動の役割を担っております。

事業開始からほぼ４年が経過しましたが、この間に、教養ゼミを用いた体験学習を起点に、特別講座、インターンシップの充実を図ってきました。さらに、学生たちが専門教育のなかで、地域志向を深く意識しながら勉強できるようにと様々な努力をして参りました。「地（知）の拠点整備事業」は、体系的な地域志向人材育成プログラムとして発展しつつあります。

地の拠点に関係した教育活動は、連携する地域・市町の皆様のご協力があって成り立っています。講師や指導役を地域・市町にお願いしたおかげで、学生は地域への関心を高め、専門性を深めるきっかけを得ています。地域・市町の皆様に触発されて、意識を高めていく学生、それに反応するように大学の教職員の意識も変わりつつあります。地域を通して社会を学ぶ連鎖的な意識の向上が大学の中に起き始めた、そんな印象を持っております。

中山間地域・島しょ部対策領域では、学生、連携地域・市町の皆様、教職員が一同に会して、円卓フォーラムを毎年開催しております。今回の第 3 回円卓フォーラムでは、中山間地域・島しょ部地域で実施された諸活動、特に、教養ゼミとインターンシップを地域と学生の視点から評価いただき、今後の活動を展望することにしました。この報告書は、フォーラムでの報告や議論の内容を簡単にまとめたものです。フォーラムでは、活動の成果と課題に加えて、今後の方針なども話し合われました。地方創生に取り組む地域・市町の皆様に、何かのお役にたてていただければ幸いです。

広島大学 地(知)の拠点　第３回円卓フォーラム

「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」

中山間地域・島しょ部対策領域

地域と学生が作る人材育成プログラム

～活動の評価と提案～

要　　旨

Ⅰ 第３回円卓フォーラムの概要

広島大学の「地（知）の拠点整備事業（COC)」

１　文部科学省により 2013 年に採択された広島大学の**「平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点」（以下、イニシアティブ拠点）**は、大学が自治体を中心に地域社会と連携して、地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることを目的にしている。広島地域の共通課題を三つ設定しているが、円卓フォーラムは**「中山間地域・島しょ部対策」（条件不利地対策）**に関係したもので、本年度は第３回目の開催になる。

２　中山間地域・島しょ部領域対策を主に担当するのは生物生産学部であり、農漁村地域をフィールドに、体験学習を出発点とする地域志向型教育を実践している。条件不利にもかかわらず、優れた活動を行っている地域住民、地域社会、市町と強く連携し、学生に体験活動やフィールドワークを通して、地域の現場で起こる様々な問題に興味・関心を抱いてもらい、深く学習してもらうための取り組みである。

３　本年度は、広島県内の７市町１１地域の住民の皆様、自治体関係者などの御協力をいただき、体験学習、インターンシップ、特別フィールド演習などを実施した。体験学習に加え、特別講座、インターンシップ、さらには地の拠点関係の科目を受講する学生は多く、「地（知）の拠点」という事業名は学生の間で広く知られるようになった。活動には生物生産学部の学生はもとより、興味関心を抱く全学の学生・院生が参加するなど、広がりをみせている。

４　中山間地域・島しょ部領域対策を担当する生物生産学では、これまでの活動を踏まえ、**「地域と学生が作る人材育成プログラム～活動の評価と提案～」**をテーマに、第３回円卓フォーラムを開催することにした。

第３回円卓フォーラムの趣旨

５　中山間地域・島しょ部領域では、連携市町・地域の皆様、学生、教員の参加によって円卓フォーラムを毎年開催し、カリキュラムを改善し、地域志向型人材育成プログラムの充実に努めてきた。第３回円卓フォーラムでは、中山間地域・島しょ部地域で実施された諸活動、特に、体験学習とインターンシップを地域と学生の視点から評価していただき、今後の活動を展望することにした。

円卓フォーラムには、生物生産学部の１年生、インターンシップ等に参加した各学部の学生、TA として参加した３年生、４年生、院生の他、連携市町の担当者、受入地域の代表者にもご参加いただいた。この円卓フォーラムにおいて、地（知）の拠点活動の評価・提案（改善策）とともに、地域志向教育、人材育成、地方創生に向けた取り組みを議論いただいた。

第３回円卓フォーラム全体概要写真

開会挨拶、参加者、構成

６　第３回フォーラムは、2017 年１月 19 日（木）に広島大学学士会館にて開催された。**広島大学社会連携担当副学長木原康樹教授**が、開会の挨拶を行った。日頃広島大学の学生の地域体験に協力いただいている地域や市町の皆様に謝意を表するとともに、フォーラムに参加する学生には地域で体験したことをもとに更に深く学んで欲しいとのメッセージであった。

７　続いて、連携市町、受入地域、関係機関からのご参加者の紹介が行われた。全体で 170 人あまり、２市３町、５地域、県庁、その他であった。（添付資料１　参照　）

８　円卓フォーラムは２部によって構成された。第１部は、体験型教育プログラムの成果（学生から 3 報告、地域の皆さんから 4 報告）を参加者で共有した。第 2 部では、総勢 170 人が体験先地域に従って 10 グループに分かれてワークショップを行い、体験学習について地域・学生双方からそのあり方を検討した。

II　１部：体験型教育プログラムの成果と評価

教養ゼミによる体験学習の成果

９　学生、連携市町、地域の皆様の報告に先立ち、**天野通子特任助教**が中山間地域・島しょ部対策領域の目的、活動の目指すもの、活動内容、成果等について報告した。2013 年度に活動を開始してからすでに 3 年余りが経過しているが、体験学習を始めとする活動に対する学生の評価は高く、中山間地域・島しょ部に対する認識を深めるとともに、専門教育に対する学習意欲を高めるきっかけにもなっている。教員の間では、学生の中山間地域・島しょ部への関心が高まり、体験学習等が専門教育に対する刺激になっていると評価を得ている。

冨永ゼミからの報告

１０　本年度に体験学習を行った２つの教養ゼミのグループが報告を行った。冨永ゼミは、本年度の体験学習発表会で最も高い評価を得た。参加学生は、東広島市安芸津町で JA 芸南とジャガイモ農家の大成秀和氏のご協力のもと、ジャガイモの収穫と選別、JA 芸南で商品化したびわの葉茶の試飲などをさせていただいた。JA 芸南と大成氏から、事前に「ジャガイモと土について、JA 芸南で開発したジャガイモの加工品の販売を拡大するにはどうしたらいいか」という課題をいただいた。学生は、事前学習で JA 芸南が開発したジャガイモを使った特産品について調べた。また、安芸津の赤土について調べ、ジャガイモ生産に適している理由を述べた。1 つ目は、土壌が酸性であり“そうか病”になりにくいこと、2 つ目は団粒構造のため、程よく水分が保持され、適度に土壌も乾燥しているため芋が甘くなりやすい、3 つ目は格子構造のため、水分が閉じ込められ干ばつに強い、4 つ目は砂状の土壌のため、ジャガイモに均等に圧力がかかり球形で密度の高いジャガイモができることであった。体験学習の後、学生は JA 芸南で栽培・販売されている 3 種類のジャガイモ(出島、農林 1 号、アンデス赤)を使って調理をし、味や触感の違い、調理のしやすさなどを調べていた。最後に、学生はジャガイモの機能性に着目して新商品の提案や宣伝方法等を述べた。

船戸ゼミからの報告

１１　船戸ゼミは、三次市の道の駅ゆめランド布野を拠点にした体験学習の成果を発表したが、昨年度からのゆめランド布野と生物生産学部の学生の共同研究から生まれた「オリゼさんのアイ酒（酒粕アイス）」に関する内容も含まれていた。教養ゼミ体験授業を受講する学生や微生物機能学を専攻する学生・院生も加わって、酒粕アイスのアルコール濃度分析、味の評価、ネーミングやマスコットキャラクターの企画などに参画することができた。今回の取り組みに参加した学生は、「地域を知る・地域と関わる・地域と協働する」という地（知）の拠点のステップを踏んで製品開発に至る成果を実感できたことで、三次市や地域の皆様への感謝の気持ちとともに、今後も地域に貢献したいという意欲が一層高まったとのことである。この過程で、「企画に向けてみんなの意見を一つにまとめていく

ことの難しさを知った」「将来食品開発の分野に進みたいと思っているので、体験できてよかった」と感想を述べた学生がいた。

棚田の井仁地区におけるインターンシップ

１２　初年度以降、中山間地域・島しょ部にて実施されるインターンシップに参加する学生が増えている。体験学習に引き続き、安芸太田町井仁地区にてインターンシップを行った３人の学生による活動報告があった。

学生がインターンシップに参加した動機は様々であった。広島県内の限界集落の生活がどのように営まれているかを体験したい、過疎化した農村がどのような問題を抱えているのかを知りたい、地元に棚田があるので棚田観光の可能性を探りたい、棚田の問題点を学習したい、将来は地域振興や地域の人と関わる仕事をしたいので、地域住民と交流できる作業をしてみたい、公務員志望でありインターンシップを通じた交流を将来に生かしたい、などであった。

１３　井仁地区は世帯数の少ない孤立した位置にある棚田集落である。バスなども通っておらず移動手段は車のみである。学生は、病院や商業施設もなく急に治療が必要な際などには、危険であるのではとの感想を述べた。学生は、鳥獣被害が考えていた以上に深刻であることに驚いた。鳥獣被害対策として防護柵が井仁地区を囲うように設置されているが、それでも被害はなくならない。高齢化によって、草刈りなどの防護柵管理作業ができにくくなっている。井仁は日本棚田百選に選ばれるほど美しい棚田だが、高齢化や後継者不足により耕作放棄地が増えている。その対策としてオーナー田制度に取組んでいるが、指導に時間が掛かるなどの課題があることがわかった。

１４　このような厳しい条件下にある井仁地区だが、学生は住民同士のつながりや強い連帯感を感じた。住民同士が古くからの知人であり、冠婚葬祭も地域で行っている。学生は

地域住民と食事を共にした際には、大家族のような温かい雰囲気を感じた。インターンシップは稲刈りが始まった時期に実施したが、参加学生には、金色に輝いている棚田が印象的であったようである。

１５　インターンシップに参加した学生は、実際に中山間地域に行って活動することで見識、理解が深まったとの感想を述べた。インターンシップ終了後も、学生たちは井仁地区からイベントなどへの参加のお誘いを受けるなどして、住民との交流が続いている。井仁地区の住民は、地域をよりよくするためには外部からの意見が必要だと考えるようになり、学生も自分の意見を述べることが大事だと言うことに気付かされた、とのことだ。参加学生は、現地に足を運び、実際に活動すること、お互い刺激となるように意見交換を積極的に行うことの大切さを学び、今後の自分たちの研究にも生かしていきたいと述べた。

１６　現地体験活動に関する学生の報告に続いて、受入地域や市町がどのように学生を迎え入れ、活動プログラムを提供されたか、また、学生にどのようなテーマに関心をもって地域のことを学んで欲しいと考えているかの話題提供をお願いした。

安芸太田町井仁地区イニピチュ会のプログラム

１７　体験学習とインターンシップの受入地域からは、**安芸太田町井仁地区イニピチュ会の河野司氏、地域おこし協力隊の友松裕希氏**が、「地域活性化からみた体験学習・インターンシップ」、について報告した。

河野氏はまず、インターンシップに参加した学生の発表に対し、非常によくまとまった発表をしていただいたと感謝を述べた。広島大学の学生との付き合いは、10 年近くになり、今では広大の皆さんの手助けがないと生活していくことも難しいとのことである。人口が減少する中、地域住民もどうにかしようという思いで一生懸命生活しているその姿を、学生に見ていただき、今後に生かしてほしいと願っている。若い人々に来ていただき、知恵を頂けることで助かることもあり、「負けずに頑張ろう」という思いで活動していると述べた。

１８　続いて、インターンシップの活動内容について、地域おこし協力隊員の友松氏より報告があった。井仁では今回が２回目のインターンシップとなった。初年度のインターンシップでは、水路掃除や草刈り、枝打ちなどの農作業が中心になった。地域内で活動内容を決める話し合いが難航し、準備が不十分であった。学生が期待した米作りに関する作業がなかったが、「なぜ草刈りをするのか」、「イノシシの防護柵の管理」などの大切さを伝えきれなかった。また、農作業が中心であったため、インターンシップに関われる地域住民が限られ、特定の人に負担が集中してしまった。成果としては、井仁地区に愛着を持ち、地域行事や企画に加わってくれる学生ができた。具体的には、毎月行われるサロンと呼ばれる茶話会にも参加してくれ、学生がご飯を作ってくれるなどの活動が続いている。若い人が来てくれるので、茶話会への地域住民の参加が増えている。

１９　今年度のインターンシップは、受け入れ時期を稲刈り時期の９月中旬に変更した。参加人数は４名（男性１名、女性３名）で活動内容は学生が説明したとおりである。今回はインターンシップの活動内容を多彩にして、関わる地域住民を増やすように努めた。草刈りや稲刈りなどの農作業に加えて、木工細工の体験、高齢者宅の障子の張替えなど、生活面での体験も盛り込んだ。また、外部の人が開催する野草を学ぶ会への参加も取り入れた。交流会やワークショップも企画し、今後の活動をサポートしてくれる人材ができることを期待した。

２０　河野氏らは、「地域の何を学んでほしいか」という点では、井仁地区に住んでいる人を知ってもらい、こういう生き方もあるということを参考にしていただきたいと考えた。自然の中で生きていく術や支え合いの精神を学んでほしいと思った。井仁地区では、宿泊施設としている井仁棚田交流館を活用し、観光や雇用といった面でも地域活性化に貢献する拠点を目指している。学生には、他地域の事例や井仁の棚田でもできる提案をしていただきたい。また高齢化で担い手が不足しているので棚田作業の省力化技術についても、研究していただきたいとの要望を河野氏・友松氏は述べた。

河川漁業の大切さを伝えた太田川漁業協同組合

２１　体験学習を実施している**太田川漁業協同組合（太田川漁協）の苗代彰氏、一月高志氏**は、「太田川での体験活動プログラムを提供して」について話題提供を行った。

太田川漁協は、広島市安佐北区可部町今井田という地域にあり、以前は 2、000 名ほどいた組合員も約 780 名まで減少した。漁協では、広島市水産振興センターで生まれた稚鮎、約 77 万匹を 4～5 月まで飼育し太田川に放流し、大きく育ったアユが太田川に戻ってきてくれることを期待している。

２２　今回の教養ゼミ体験学習は、「見ていただき、手で触っていただきたい」をテーマに計画した。体験学習を行った場所は広島市安佐北区久地という地域で、吉山川という支流である。学生には川にたくさん流れてくるゴミ・捨てられているゴミを見てもらい、「なぜこんなものが川にあるのだろう」、と考えてもらいながら採集してもらった。川には、ペットボトルや空き缶、大きいものではカーペットなどもある。河川の清掃は、年に一回、漁協組合員が総出で行っているが、学生にはその活動に参加してもらった。足の踏み場もないくらい流れ着いたゴミを見られることは恥ずかしかったが、ともかく現状を見てもらいたかった。川の中には石ばかりではなく、砂もあるが、この砂が魚の敵である。砂が石と石の間にめり込んで魚の隠れ家を奪い、魚は草の間を住処にしている。漁協は本来ならこの砂を除去する作業を行いたい。学生の皆さんの頑張りで、川が本当に綺麗になった。

２３　近年、川に触れる機会が極端に減っている。学生には、箱メガネを使い水中生物の観察をしていただいた。実際に魚を採ったりする学生もいて、非常に楽しそうであった。昼食には太田川で漁獲された鮎を自分で焼いて食べてもった。河川漁業の紹介をし、漁業に関する地域ルールを話し、作業用具、釣り道具などに触れてもらった。河川漁業に従事する組合員としては、大学生が少しでも川のことを好きになってくれればいいと思って取組んだ。事後の学生アンケートではいい評価をいただいたこともあり、次年度は趣向を変えて別のことも企画してみたいと思っている。川にはいいところがたくさんあるので、海ばかりでなく川も好きになり、川の魚も食べてほしい、とのことである。

自治体と地域の視点から：大崎上島町役場と海藻塾

２４　毎年、複数の体験学習を行っている大崎上島町からは、「海と島の体験活動プログラムを提供して」をテーマに、**大崎上島町食文化海藻塾の代表道林清隆氏、大崎上島町役場地域経営課の森下隆典氏**から報告があった。

２５　森下氏からまず、大崎上島町についてと教養ゼミ体験学習の受入れの経緯について説明があった。大崎上島町は、瀬戸内海にある完全な離島で、気候は温暖で柑橘類を中心とした農業を行っている。その他にも、造船業などものづくりに関する業種がたくさんある。周辺の海域には海藻類のアマモを中心に約 300 種類程度が生育している。島の最高峰の神峰山（標高 453 メートル）は、瀬戸内海の 115 の島が見える観光スポットである。それ以外には、広島レモン、広島サーモンの養殖、オイスターボンボンというノロウィルスにかからない牡蠣を生産している。町では、観光客を増やすために平成 23 年から”海と島の体験プログラム”を開発し、平成 25 年から中学生・高校生を中心に体験型修学旅行の受け入れを開始している。これと同じくして広島大学との交流が進んでいる。このような島の特徴から、教養ゼミ体験学習では、柑橘栽培の体験と海藻塾を含めた漁業の 2 つのプログラム提供している。

２６　森下氏は、大学生の体験学習の受入れに際し、行政側では農業・漁業の体験を通じて感じたことを大学での研究に生かしてそれを提言してほしいことを強調した。更に参加した学生の人生設計の中に大崎上島町での体験・経験が少しでも役に立つことができれば幸いである。学生のなかから、将来大崎上島町に移住したいという人があらわれたら、大変嬉しい、と述べた。参加した学生には、大崎上島町が離島という立地条件で柑橘栽培を行い、限られた魚種・漁法を用いて行う漁業の現状を把握したうえで、10 年後を予測し、

今後検討すべき課題について探り、それらを学んで卒論等で討論し、提案していただきたい。あわせて、担い手不足と後継者確保の問題ついて検討し、大崎上島町の立地条件の中で就労したい、来てみたいと思わせる取り組みは何なのかを研究していただきたい旨の説明があった。

２７　海藻塾長道林氏からは、海藻塾の活動、教養ゼミ体験学習の受入れについて報告があった。海藻塾は、以前から生物圏科学研究科付属の水産実験所の加藤亜記准教授との深い連携関係がある。漁業組合の組合員と海藻塾のメーンバーは、加藤准教授から専門的な検知を現場で指導を受け、大崎上島周辺の資源調査や母藻設置等を行っている。教養ゼミ体験学習を受入れようと決めたきっかけは、加藤准教授とのこれまでの連携関係の他に、水産庁の水産多面的機能発揮対策事の全国報告会で、生物圏科学研究科の先生の基調講演を拝聴し、広島大学の先生方の意気込みを感じたからである。

２８　海藻塾の活動は 1～5 月が最も活発な時期で、観察・調査・増殖等を行っているが、教養ゼミが行われる 6 月は海藻が非常に少ない時期となる。そのため、参加する学生には申し訳ない思いがあり、海岸の観察やゴミ収集だけでなく、取っておいた海藻をいろいろな料理に調理して試食してもらった。海藻塾では、瀬戸内海の磯焼けや栄養塩不足の問題についても多くの方の意見を聞きながら取り組んでいきたいと考えている。参加した学生の中から、大崎上島をフィールドにして研究を進めていく人が現れたらいいと述べた。

自治体の視点から：世羅町役場産業振興課の取組

２９　連携市町の視点から、「地方創生活動における大学との連携の意義」について、二つの役場に報告をお願いした。まず、本年度は二つの体験学習グループとインターンシップを受け入れていただいた**世羅町役場産業振興課担い手支援係の和泉美智子氏**と**井口都氏**から報告を受けた。井口氏からは、世羅町の紹介とインターンシップの取組について報告があった。世羅町は西条から車で一時間ほど東へ走ったところにある中山間地域で、町内

には、駅伝で有名な世羅高校がある。農業も大変有名で、梨の農園も多く県内一の生産量を誇る。

３０　今年度のインターンシップは、世羅町で積極的に取り組んでいる 6 次産業化の取組を見て体験することを目的にメニューを組んだ。一日目は、オリエンテーションで世羅町と世羅町の農業について説明をした。二日目は集落法人である株式会社恵に行き、脱穀や乾燥の施設を見学し、その後キャベツの生産現場で圃場管理の作業を行った。午後は、大豊農園で梨の選果や販売所の見学、ぶどうの選別などを見学し、規格外の梨を自分でむいて試食した。三日目は、集落法人聖の郷かわしりでアスパラガスの収穫体験・選別の見学をした。この後、町内にある様々な産直市場を見学した。移動後に、観光と農業を結びつけて体験型の観光をされている酪農家のファームランドドナで取り組みの背景を聞き、チーズ作りの体験をおこなった。四日目は、世羅町で 6 次産業化総合化事業において制作した商品のサンプリング調査を道の駅で行った。消費者の声を直に聞いて、どのような商品が売れるのか体験してもらった。最終日にはワークショップを持ち、これまでの体験を踏まえて「今後の 6 次産業化のあり方」、「どうやって世羅町に来てもらうか」、をテーマに意見を交換した。井口氏は、学生が考えたアイデアの中には面白いものがいくつかあり、印象に残った、と述べた。

３１　和泉氏からは、教養ゼミの受入れと大学との連携のあり方について報告があった。教養ゼミでは、5 月 28 日に梨農園で一次摘果の作業を体験した。梨は世羅町を挙げて振興しているが、一昨年度から黒星病という病気にかかっている。世羅梨のブランドを守るプロジェクトとして病害花と病害葉を取り除く作業を世羅高校の学生もおこなっているが、広島大学の教養ゼミでもプログラム化した。

３２　世羅町は合併後 13 年が過ぎたが、年々200 人の人口減があり、合併時 19、000 人の人口が現在 16、000 人となり、農業においても 75 歳を超える高齢者の占める割合が高くな

った。6 次産業化を進めるにも人材育成が重要な課題となっている。今後は高校や大学としっかり連携して人材育成を図り、様々な研究活動に協力しながら地域課題の解決を図っていきたい。世羅町には梨を始めとした果実がたくさんあり、機能性や効能の検証などをしながら加工食品の開発を産学官連携でおこないたい。連携を通じて、人的資源の交流にも取り組めないかと考えている。再来年度は 5 大学合同ゼミも世羅町をフィールドに開催して頂けるとお聞きしており、今後も世羅町と広島大学の連携を深めて、産業振興の創出に努めたいと述べた。

自治体の視点から：三次市役所企画調整課の取組

３３　**三次市役所企画調整課の杉谷幸浩氏**が、地域との調整をどのように行ったかに触れながら、役場として体験学習やインターンシップをどのように受け入れたかを報告した。また、ゆめランド布野の道の駅での学生と共同した酵母入りアイス作りの経験を披露していただいた。三次市は広島県北部の中国山地の中心にあり、人口は 55、000 人で東広島市の 1/3 程度、一方面積は県内で 3 番目の広さがある。三次市の観光資源の一つは、霧の海で、ちょうど今頃の時期に見ることができる。ブッポウソウという鳥も日本一の飛来地になっている。なお、三次市と広島大学は、平成 19 年度に包括連携を締結した。

３４　地(知)の拠点事業における体験学習の受入れは、平成 26 年から始まった。受入地域は三次市の方でも検討し、中山間地域の課題があるなかでも積極的に地域活性化に取組んでいる布野町とした。同町は、三次市の北部にあり、冬は 1 メートル程度の積雪もあり、人口は 1、500 人の農業が中心の地域である。町内には、道の駅ゆめランド布野や大前農園などがあり、学生などの受け入れ経験をもっている。中国やまなみ街道が開通したことで主要道路の国道 54 号線の交通量が減り、道の駅の利用者の減少が懸念されている。こうしたなか、道の駅ゆめランド布野は、独自の取り組みで地域活性化に取り組んでいる。

３５　教養ゼミ体験学習では、ゆめランド布野を中心に 3 年間取り組んできた。社長の講義や大前農園での収穫体験、アイスの手作り体験、江の川漁協の協力を得ての河川清掃を

行った。インターンシップでは、平成 27 年から取り組み、こちらもゆめランド布野を中心に行ってきた。毎年 3 名ずつを受け入れ、その活動は中国新聞にも取り上げられた。

３６　こうした活動を続けるなかで、平成 27 年に受け入れた船戸ゼミの学生から、道の駅と連携して新しいアイスを共同研究したいという提案を受けた。広島大学と道の駅ゆめランド布野、三次市の 3 者で酒粕アイスの共同研究が始まった。酒粕を使ったアイスに決まったのは、船戸先生が微生物の専門であること、道の駅で新たな地酒を生産・販売することが決まっていたこと、隣の作木町にも地酒があったことなどからである。共同研究では、平成 28 年夏の完成を目標に、実質 4 月から月に一回共同研究を行い、４月には試作会を開いて酒粕の添加量を検討し、5 月にも再度試作・試食を行い、味を決定した。アイスのアルコール量の測定は船戸ゼミの大学院生が中心となっておこなった。6 月の会議では、学生と”オリゼさんのアイ酒”という名称とオリゼさんのキャラクターを決定した。学生にキャッチフレーズや商品紹介の POP 案等の提案をしてもらい参考にした。7 月の教養ゼミでお披露目会を開き、8 月には広大生協でも販売が開始された。「オリゼ」とは麹菌の学名に由来している。販売状況は、道の駅と大学で約 3、700 個販売している（29 年 1 月時点）。学生にも PR 活動をしていただき大変好評である。

３７　酒粕アイスの共同研究では、新聞や地元のケーブルテレビに取り上げていただいた。商品を販売するということで、一定の経済効果もあった。学生にとっては自分たちが考えたものが実際に販売され、良い学びの場になったのではないかと思っている。この共同研究は、地域活性化に非常に意義があるものになった。

３８　杉谷氏は、地域体験を通して、たとえ条件が不利と言われる中山間地域であっても、そこに住む人達の様々な取り組みを直接見て何かを感じ、学生の理解関心が深まったのであれば嬉しく思うと述べた。現在は地域体験が中心になっているが、今後は、中山間地域の課題解決に向けた次のステップが大事である。酒粕アイスの取り組みは、地域体験から発展した良い事例の一つである。中山間地域に対する報道は、ネガティブな内容が多いが、今回の体験で面白さも感じていただいたのではないか。今後学生には、条件不利地域でも持続的に農業ができるような生産方法の確立や鳥獣被害の対策について考えてもらいたい。杉谷氏は、行政職員の立場として、学生には社会人になっても仕事の場、生活の場などとしてこの中山間地域に関わり続けてもらいたい、と結んだ。

ワークショップの進め方

３９　第１部を閉じる前に、天野特任助教が第２部の**「求める、求められる、人材育成プログラム―市町、地域、学生、教職員によるワークショップ―」**に関する説明を行った。ワークショップは、今年度の教養ゼミ体験学習の班ごとに 10 グループにわかれておこなった。フォーラムにご出席いただいた連携地域・市町の方々は、それぞれ関係する学生がいるグループに参加していただいた。各グループには、上級生がファシリテーターとして入り、司会進行をおこなった。議論の時間は 50 分、最後に全グループが集まって討論の内容を学生が報告した。

４０　討論では、フィールド教育を通じて、学生・教員は地域を的確にとらえる目をどのようにして養うか、地(知)の拠点の活動を連携地域の活性化にどのように役立てていくか、連携市町・地域の方、学生が議論した。討論が進みやすいように、それぞれに話題提供する内容について以下のものを事前に伝えている。

連携市町・地域の方

１．学生の体験学習、インターンシップ等を受け入れてのご感想

２．学生の地域体験活動に対する評価、改善点

３．地方振興や活性化に向けて大学に期待すること、大学への苦言、提言など

学生

１．COC のフィールド体験に参加して、印象に残ったこと

２．今、フィールド体験したことを振り返ってみると、何ができたらよかったか、知りたかったか

３．２、３年生に進むときに、自分が経験したフィールド体験を地域活動や勉強にどのように生かしたいと思うか

太田川漁協・杉野ゼミの報告

４１　太田川漁協からは、学生が来てくれてうれしいが、作業が地味だったのではないかと心配している。毎年提供する内容がワンパターンになりがちなので、新しい提案があればほしいとの発言があった。参加した学生は、「鮎の塩焼きを初めて食べた」、「箱メガネで魚を見ることができた人は楽しかった」、「河川の清掃をした人も自分でやってみて大変さがわかった」など感想を述べた。次回への改善点としては、鮎釣りが解禁された後の６月になってから、教養ゼミを行い、鮎釣り体験を取り入れたらどうか。2～3 年生になりどのように生かしていきたいかについては、吉山川は水質の汚濁が問題になっているので、知識をつけて水質の調査を行うなどの貢献をしたいと述べる学生がいた。

世羅幸水農園・河合ゼミの報告

４２　世羅町役場からは、インターンシップでは今回生物生産学部以外の学生が多く、今までの学生と違う着眼点での話が出て興味深かった、との感想が述べられた。教養ゼミでは、梨の黒星病の発生が減ったという発言をいただいた。学生からは、摘果作業という普段経験できないことができていい体験になった、自分の地元の農業にも興味が湧いた、梨の病気や防カビ対策などの専門的知識を深め、今後の研究に結び付けたいという意見があった。課題としては、現地での現状理解をより深めるために、事前学習をもっと充実できたらいいという意見があった。それに関して、行政や農家の方々が協力しても良いという意見をいただいたと述べた。

世羅大豊農園・三本木ゼミの報告

４３　世羅町役場からは、現場のプロの方とフィールドワーク自体も初めての学生が一緒になって活動をすることで、それぞれの異なる視点が交じり合い、普段の現場にはない多様な意見が見られた、と発言があった。学生からからは、自分達が体験した梨の摘果の他に、他のグループが報告した鮎の投網漁など、勉強するだけではわからないことがそれぞれの体験によって知ることができ、更に興味が湧いたという感想があった。課題としては、フィールドワークする期間が限られている点と、一部のことしかわからないことである。学生としてはもっとより多くのことが知りたいので、年単位で定期的に取組むことができればもっと踏み込んだ学習ができる。また、受入農家も学生の体験・研修によって助かることがあるのではないか、という意見が出た。

大崎上島町シトラスかみじま・上野ゼミの報告

４４　初めての農作業体験で農業の現場の雰囲気や柑橘がどういった過程を経て作られているか知ることができた。また、農業は高齢者が多く若い人が少ないという現状を実感できたという意見もあった。課題としては、もっと地域住民と話し合う場が欲しかった。高齢者の問題や、新商品の開発などについて話をしたかった。継続的な作業をおこない、摘

果した後どのように成長していくのかみてみたい。また、他の地域の実習も体験してみたいという意見があり、実際に体験したことで新たな視点で勉強ができるという意見もあった。

JA 芸南・冨永ゼミの報告

４５　COC に関することでは、活動の継続性の大切さが議論になった。また、教員の参加があり、学生だけでできないことができる点は良かった。今回の体験内容はジャガイモの選別が中心で、受け入れ先の方も遠慮しているのではないかと感じた。一日保険などに加入するなどして、もっと深い体験をしたいという意見もあった。草刈りなど、実際の農作業はもっと大変なことを体験させてもらいたい。また、商品開発やブランド化を大切にし、外部への発信をして稼げる農業によって若者が定着できるような仕組みを考えたい、と述べる学生がいた。高齢者が多く発信が苦手ということなので、そういう点を学生が補うことができればといった意見もあった。

三次市ゆめランド布野・船戸ゼミの報告

４６　連携地域の参加者から、農業に対して３K というマイナスのイメージがあったのではないかということを聞かれた。学生からは農業は生きていくうえで不可欠な産業で悪いイメージはない、今回の体験学習は大変楽しかったが、農業のきついところも教えていただきたいと述べた。受入農家から、これからの農業で付加価値や顔の見える農業が大事だという意見を聞き、学生からは、先輩方がアイスの開発をされたように積極的にアイデアを出していきたいと発言があった。課題として、一日の体験では、わかることは少なく体験が思い出で終わってしまうので、インターンシップや自分で行ってみて、体験することが大切だと

大崎上島町海藻塾・前田ゼミの報告

４７　普段できないような乗船の体験ができ印象深い体験になった。2 年生で配属される、水産コースにも新たな興味が持てた。フィールドワークに関しては、1 日限りなので、事前

学習でストーリー性を持ち、問題点や改善点を自分たちで深く掘り出して体験すればより良いものになったと感じている。海藻塾では、講義を聞くばかりでアウトプットする場がなかったので、次回は料理の作り方などを教わり、帰ってから自分で作ってみるなどの体験がしたかった。形式張ったものでなく島の人と普通にコミュニケーションを取ることで島の良さももっとわかるのではないかと述べた。

JA 芸南・橋本ゼミの報告

４８　座学が中心となる授業が多いので、実際に地域に出て体験することは、いろいろな面でプラスになったと感じる学生が多い。じゃがいもに関しても手作業で人手がいるので、人手不足という農業の現状も知ることができた。一方、経営や流通など実際の経済的な側面、安芸津という地域性についてもっと知りたかった。じゃがいもだけでなく、安芸津は東広島市で唯一海があるので、そういったことも取り入れてほしかった。来年度以降、担い手不足など課題を解決するためにどんなことをしたら良いかなどのテーマを持って望んでいくといいと思った。また研究につながるような場所へ行くことができると 2～3 年生になっても良いと思うと述べた。

安芸津漁協・浅川ゼミの報告

４９　他の班の人の話を聞くと、地域の食べ物を食べる機会もあり、楽しそうだった。私達は漁港にたまったゴミを拾い、それを集計することがメインだったので、体験は辛いだけであった。今回の課題としては、漁業について体験をしながら学びたかった、辛いだけでなく楽しいと思えるような体験や漁師さんのやりがいなどもっと聞いて交流を深めたかったという意見があった。今日のグループ討論には、豊栄町のトムミルクファームの沖氏が参加してくださった。この班に豊栄町を知っているのは 2 人しかいなかった。地域の知名度が低いままでは、インターンシップや学生を巻き込む企画があったとしても、学生は興味をもてないので西条農業高校などとも連携して活動を広めていったほうが良いのではないかという意見があったと述べた。

安芸太田町井仁地区・吉田ゼミ

５０　井仁の住民だけは、井仁の棚田を維持することが難しいので外部から人を呼び、守っていくという話になった。そのためには、一つ目に井仁の体験会で木工細工や障子張りなどをして井仁に興味を持ってくれるひとを増やすこと、二つ目は SNS で体験会などを伝えて沢山の人を呼ぶことである。課題としては、どのようにしてアピールするかだが、人が温かいことと風景がきれいなことの他に、美しい棚田、水、生き物を調査すると、より魅力的な発信ができるきっかけが生まれるのではないかという意見もあった。安芸太田町には人とのつながりを大切にする家族のような温かさがあり、それを通じて井仁を知るこ

とで、井仁に興味を持つ人が増えるのではないかと思った。課題としては、事前学習が不足していたことでそこまで親身になれなかったと述べた。

５１　グループ討論では、連携市町・地域の方々と学生がそれぞれの垣根を越えて自由に発言し、意見を交換し合うことができた。学生の発言のなかには、教員や連携市町・地域の方が教育的に意図した内容がうまく伝わっていないと思われるものもあった。これらは、教員の責任として今後、溝を埋めていけるように努力していく必要がある。

フォーラム討論の総括

５２　司会の**細野賢治准教授**が討論をしめくくり、**広島県地域政策局中山間地域振興課の横田晋一氏**から講評をいただいた。横田氏は自身の大学生活を振り返り、当時は地域に出て体験するこのような授業はなかったのが残念である。今回、学生が現場で感じられたことは多々あり、机上と実際に体験するのは大きく違ったと思う。今回の活動を通じて肌で感じられたことを今後も大切に検討してほしい、と述べられた。広島県は中山間地域が抱える課題解決に力を入れているが、答えは出せていない。県の施策は、ハード面の支援でなく、”ひと・ゆめ未来塾”という研修のような、地域資源を活用できる人材を育てること

にシフトしている。興味がある学生にはぜひ参加してほしい。

５３　**山尾政博教授**がまとめを行った。中山間地域・島しょ部対策領域では、農山漁村地域の強みを活かし、地方創生のための努力をしている地域・市町と連携しながら、食料生産・資源・環境・生態を学ぶ学生を対象に、地域社会で活躍できる人材を育成することを目的にしている。この活動を通して、学生は中山間地域島しょ部の状況に関心を高め、農林水産業、食品産業、食料資源や環境に興味を深めている。高学年の学生は自身の調査研究の内容に反映させていることが確認された。ＴＡとして参加する院生や学生にとっても、地域での活動は有用である。教員は、地域志向型教育の効果を認め、地域・市町が直面する課題を深く理解するようになっている。教員の専門性を生かした知識・技術を地域・市町に提供する動きが広がり、研究としても発展させつつあることが確認できた。

５４　円卓フォーラムの場において、連携市町・地域の出席者からは、体験学習・インターンシップ、調査や卒論等を通じて、学生が地域に新たな魅力を発見し、自ら進んで調査研究する仕組みづくりができた、との評価をいただいた。地域・市町と大学が共同し、現在及び将来の人材を中長期的な視点で育てることができつつある。連携地域の活性化の一つとして、大学生や若者を地域に呼び込み、受け入れる基盤作りが進むことが期待されている。体験学習、インターンシップ等により、地域農漁業資源が活用される可能性があり、大学のアイデアと技術を活かした商品づくりの動きにつながる。連携市町・地域の参加者からは、学生や若者の目を通して、農漁村社会や文化を再評価する動きがでてきた、との報告をいただいた。

５５　地域志向型教育を持続的に実施するには、フィールド教育を始め、地域と深く関わる教育研究分野に応用できるシステムにしていく必要がある。地域と大学で得たノウハウを蓄積し、持続的で効率的な人材育成プログラムの構築を目指していく段階に入ったことが確認された。

吉村研究科長による閉会挨拶

５６　閉会にあたり、**吉村幸則研究科長**が連携市町・地域からの参加者、学生、教職員に対して感謝の意を表した。農学分野を専攻する学生が中山間地域・島しょ部の農漁業、食品製造業、流通はもとより、社会状況に対する理解を深めることは意義あることである。COC の活動は地域志向科目の充実につながっており、今後の人材育成のあり方を示すものになっている。大学が地域との連携・交流をはかり、より深く社会貢献していくためには何が必要かを、COC 活動は示してくれている。今後も、中山間地域・島しょ部領域における大学全体での取り組みを強めていくことが述べられた。

善村室長による閉会

５７　最後に**善村支援室長**が、円卓フォーラム参加者全員に対して謝辞を述べ、閉会を宣言した。

別添資料1　第3回円卓フォーラムの出席者

	人数	出席者		
広島県地域政策局　中山間地域振興課	1	横田様		
三次市　政策部　企画調整課	2	杉谷様	松本様	
三次市　布野支所	1	植岡様		
(株)布野特産センター	1	廣田様		
大前農園（三次市）	2	大前様	丸山様	
世羅町役場　産業振興課	2	和泉様	井口様	
大崎上島町　地域経営課	1	森下様		
大崎上島町食文化海藻塾	1	道林塾長		
安芸太田町　地域づくり課	1	矢立様		
安芸太田町　地域おこし協力隊	3	友松様	笠井様	志賀様
いにぴちゅ会(安芸太田町)	1	河野様		
井仁自治会（安芸太田町）	1	大江様		
太田川漁業協同組合	2	苗代様	一月様	
東広島市　産業部農林水産課	1	宮岡様		
東広島市　政策企画部企画課	1	平田様		
有限会社トムミルクファーム	1	沖様		
東広島市　道の駅湖畔の里福富	1	中村様		
広島市立大学	1	國本様		
ファシリテーター　学生・院生	13			
インターンシップ　発表者	4			
2年生等	13			
1年生	104			
その他教職員関係	15			
合計	173			

第3回　円卓フォーラム　　報告資料
平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点

第3回　円卓フォーラム
地域と学生が作る人材育成プログラム～活動の評価と提案～

地域とともに作り上げた、活動の概要と成果

平和共存社会を育むひろしまイニシアティブ拠点
中山間地域・島しょ部対策領域

1. 目的、期待される成果

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　2

条件が厳しい地域社会の現状

「中山間地域」が7割を超える

■ 人口及び面積

区　分	人口（A）	面積（B）	人口密度（A／B）
広島県全域	2,860,750人	8,480㎢	337.4人／㎢
うち中山間地域（構成比）	388,670人（13.6%）	6,062㎢（71.5%）	64.1人／㎢
うち他の地域（構成比）	2,472,080人（86.4%）	2,418㎢（28.5%）	1,022.4人／㎢

※　人口は H22国勢調査、面積は2010年世界農林業センサスによる。ただし、一部離島の面積は H22国勢調査による。

広島県は、瀬戸内海島しょ部や中山間地域の過疎化・高齢化が進む地域で、活力低下という問題に直面している

県内には、積極的にこの課題に対応し、農山漁村地域の活性化に取り組み、地方創生のために努力している地域が多くある

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　3

目的と期待される成果

目的：
「平和共存社会を育む　広島イニシアティブ拠点」のもと、
農山漁村地域の活性化に向けて、
地域社会で活躍できる人材育成をはかる

期待される成果：
成果１　食料生産・資源・環境・生態を学ぶ学生を対象に、地域志向型教育が、段階的に実践される

成果２　教育プログラムの充実がはかられる

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　4

実施する教育プログラム

持続可能な食料生産と生物資源の有効活用に貢献する科学的知識と広い視野を持った人材育成

学年進行に応じた専門性の高い教育

卒業論文
専門性や地域性の高い卒論研究指導

COC教育科目

コース別専門教育
応用教育
専門基礎教育（学部共通）
フィールド教育
【課程3】地域志向型インターンシップ
【課程2】連携地域特別講座

教養教育(全学共通)
基礎力と学際的視点を養い、能動的学習への動機付け
【課程1】教養ゼミ体験学習

より深い地域体験

地域理解を深め、専門教育と応用実学の関係を知る

専門教育への動機付け

地域・フィールド性の高い教育

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　5

地域志向型教育の実践、連携市町と地域

中山間地域島しょ部領域では、自治体や地域と大学が組織的に連携して、
「中長期的な視点で学生を育てる」、「地域連携から地方創生」に向けた取組を行なう

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　6

中山間地域・島しょ部対策領域

2. 地域志向型教育の出発点と展開

―教養ゼミ体験学習を出発点として―

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　7

地域志向型教育の導入部、教養ゼミ体験学習

教養ゼミ体験学習のながれ

1. 1年生とチューターが **事前学習**（4月～5月下旬）
   体験の意味
   目的意識を
   持たせる
2. 地域の方を講師に **体験学習**（5月下旬～7月上旬）
   地域の講義
   地域の作業
   地域の方
   との交流
3. 1年生とチューターが **事後学習**（6月～7月）
   地域の課題
   をまとめ、
   自分達が
   できることを
   考える
4. **活動報告会**（7月下旬）
   事後学習の
   内容を
   プレゼン、
   地域へ提案
5. **秋冬の体験学習**（1～2地域）（10月、2月）
   収穫体験
   農作業の
   結果を知る

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　9

中山間地域・島しょ部連携特別講座

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　10

中山間地域・島しょ部連携インターンシップ

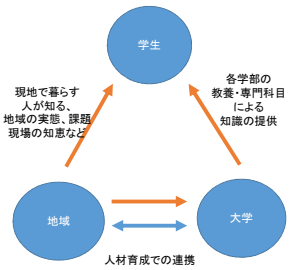
3. 大学が地域と連携する意義、地域が大学と連携する意義

連携の実績

12

<©COC中山間地域・島しょ部領域>

地域と連携し、現場の実学を伝える

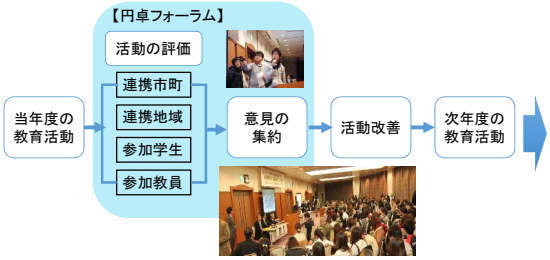


1. 学生に現場の実学伝える
2. 学年進行に応じた専門教育を学び、現場で得た興味関心を高める
3. 関わった地域と関係する卒論研究につなげる
4. 教員の専門性を生かした研究に発展させ、地域との連携を深める

<©COC中山間地域・島しょ地域>　13

円卓フォーラム

フォーラムで目指すもの
【目標1】地域と連携して学生を育てる地域志向型教育のプログラム化
【目標2】地域と大学の効率的な連携とプログラムの効率的な運営の在り方
【目標3】地域が抱える課題改善に地域志向型教育の取組をどう役立てるか



<©COC中山間地域・島しょ部領域>　14

道の駅ゆめランド布野・三次市と学生が連携し「酒粕アイス」が誕生

学生提案

道の駅ゆめランド布野

道の駅＆広大生協で好評販売中

教養ゼミ体験授業が契機

学生提案の新アイス

商品開発会議状況

酒粕アイス試作状況

オリゼさんのアイ酒

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　15

4. まとめ

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　16

達成状況

- 連携7市町、9つの連携地域とのご協力により、着実に達成

1）「地域を知る」・「地域と関わる」・「地域と協働する」といった3段階に対応して企画された、地域体験とPBL方式を結合させた「教養ゼミ」は大きな成果

2）連携市町・地域の参画を得て作る教育プログラムの確立

- 学生の視点が地域や農林水産業の実態に向かい、教員と学生との間で議論が深まる。また、調査研究内容に反映される

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　17

今後の課題

1. フィールド教育を通じて、学生・教員は地域を的確にとらえる目をどのようにして養うか
2. 地(知)の拠点の活動を連携地域の活性化にどのように役立てるか

円卓フォーラムにご参加いただいたみなさまと一緒に考えていきましょう

<©COC中山間地域・島しょ部領域>　18

冨永ゼミ　報告資料

食べて知る
じゃがいもと土

A班（冨永班）

事前学習について①

おもろい農の取り組み

援農ボランティア事業を中心として、就農者の育成や特産品の開発など、地域に根付いた事業を展開している。

JAの特産品

・じゃが粉
・じゃがの華

http://jageinan.net

事前学習について②

安芸津の赤土について

✓ 赤色。土壌が酸性で、団粒構造をもつ。
　また、安芸津特有の格子構造を持つ。
✓ 砂状で、サラサラしている。
✓ ミネラルが豊富

団粒構造・格子構造

✓ 水はけのよさ，保水性をあわせ持つ。
✓ 多少の干ばつには耐えられる。

（http://poohchan-cute.net/category/etc/etc-with-rabbit.html より出展）

事前学習について③

・じゃがいもと土の関係性

じゃがいも農家
大成さんの夢

✓土壌がアルカリ性だと病気にかかる。
✓土壌の水分が少ないと甘くなりやすい。
✓赤土は砂状なので傷が付きにくく、また均等に圧力がかかるため球形になりやすい。
✓ミネラルが豊富なのでおいしくなる。

安芸津の赤土は栽培に最適！！

じゃがいもの品種

・出島
JA芸南の看板じゃがいも。
ホクホク感がつよく、皮が薄い。
春秋２回つくれる。
オススメ：じゃがバター

・アンデス赤
表皮が赤い。
粉質で、明るい黄色。
ホクホクして甘い。
オススメ：みそしる

・農林１号
環境適応性が大きい。
煮崩れしやすい。
オススメ：コロッケ
　　ポテトサラダ

ジャガイモ3種類の比較

デジマ

アンデス赤

農林１号

冨永ゼミ　報告資料

断面の比較

断面の色と花の色が同じ色

農林１号　　アンデス赤　　デジマ

調理例１～煮崩れしやすいもの～

じゃがバター

ポテトサラダ

調理例２～煮崩れしにくいもの～

味噌汁

肉じゃが

びわの葉茶について

- 安芸津産の「びわ」の葉を使ったお茶。
- 抗酸化作用や利尿作用があり、健康や美容にも良いとされている。
- 安芸津のびわの葉茶にはハーブがブレンドされており、甘みがあり飲みやすい。
- ノンカロリー・ノンカフェイン。

びわの葉茶
試飲お願いします！

新製品案

- 顔パック
- シャンプー
- いもみじまんじゅう
- 熱冷まシート
- じゃが米

ジャガッツ

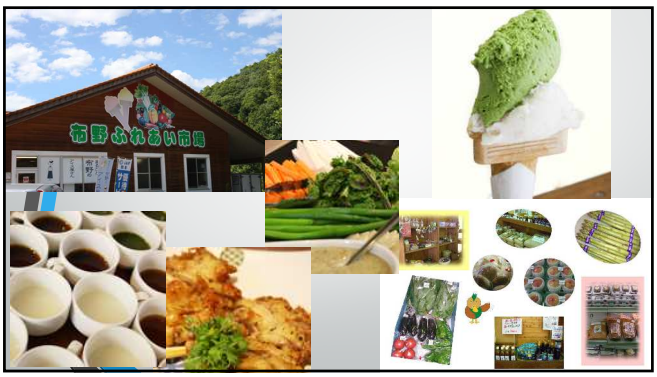
これからの課題と展望

- 宣伝方法
  1) 市報等に載せる。
  2) 有名な料理人などにレビューをしてもらう。
  3) 新聞で広告する。
  4) 女子受けを狙った新商品を発明する。etc…

売る商品の宣伝方法、表示を客層により変えていく必要がある。

船戸ゼミ　報告資料

地域体験学習ゆめランド布野
船戸ゼミ

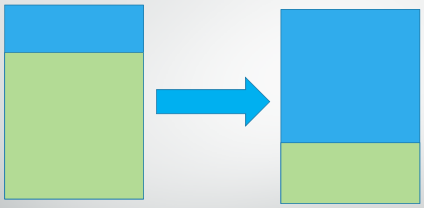


1日のスケジュール

- 酒粕アイスお披露目会
- 道の駅ゆめランド布野についての講義
- 鮎の塩焼き体験
- 投網体験
- アスパラガスの収穫体験
- アイスの手作り体験

酒粕アイス・アイ酒のお披露目会

漁獲量の減少



投網体験

船戸ゼミ　報告資料

鮎の塩焼き体験

昼食

アスパラガスの収穫体験（大前農園にて）

アイスの手作り体験

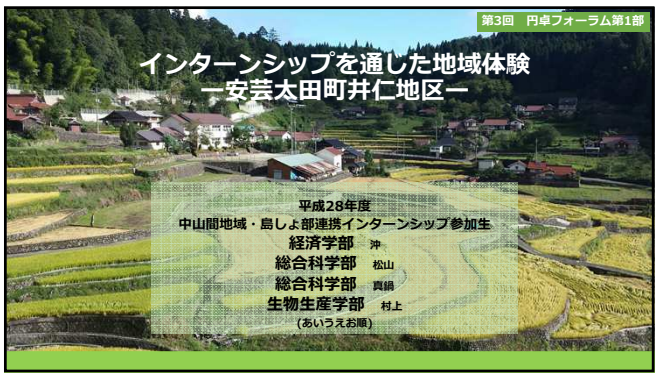
より布野を知ってもらうために

- SNSの活用
- 野菜のパッケージへ宣伝シールの添付

私たちからの提案

- 布野のお酒と餅を組み合わせる
- アスパラチップス
- アスパラスムージー

インターンシップ研修　報告資料



井仁のインターンシップを希望した目的

・限界集落の生活がどのように営まれているのかを体験したいと思ったため（沖）

・農業に興味があり、過疎化が進む農村の問題を実際に知るため
・地元に棚田があり、棚田の問題を知りたいと思ったため（松山）

・将来地域振興や地域の人と関わる仕事をしたい
・地域の方々との交流ができる作業が多くあったため（村上）

・公務員志望であり、地域の方々との盛んな交流の経験を
将来に生かしたいと考えたため（真鍋）

インターンシップのスケジュール

	午前	午後
9/12	大学出発 道の駅で昼食	対面式 井仁の歴史、現状について講義 地区の散策
9/13	あかり絵の体験	一人暮らしのお宅で障子の張替え作業
9/14	鳥獣害対策用フェンスの草刈り	昔の民具の説明、データ整理 自伐型林業のフォーラム参加
9/15	棚田オーナー田の稲刈り・はで干し	
9/16	野草の採取 野草をつかった料理体験	ホンモロコを使った料理体験 井仁地区の方々との交流会
9/17	インターンシップを振り返り、田舎で 学ぶことを考えるワークショップ	道の駅で昼食 帰学

地域の方々の生活の手助け

↑障子の張り替え

↓草刈り

あかり絵

3．研修を通じて知ることができた地域が抱える課題

交通手段・病院や商業施設の少なさ

インターンシップ研修　報告資料

イノシシなど有害鳥獣

草刈りを行った防護柵周辺
井仁地区を囲うように設置

イノシシ等の対策

高齢化により
防護柵周辺の草刈りが困難に

森林　　農地・集落

耕作放棄地

耕作放棄地の増加

草刈りなど管理が困難

稲刈りを行った田んぼ
＝オーナー制度により
貸している農地

4．私たちが感じる、井仁地域の魅力

住民同士のつながり・強い連帯感

きれいな景色

5．まとめ
—研修で得たもの、
今後に生かしていきたいこと—

中山間地域への見識・理解が深まった

普段なかなか訪れることのない地域へ行き
地域の魅力を知ることができた

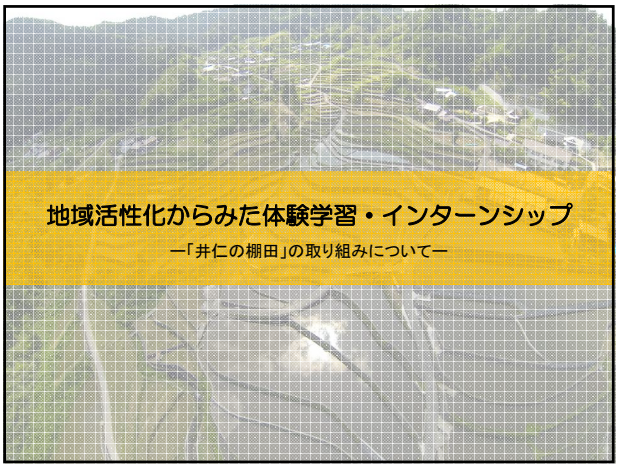
その後も引き続き地域に呼んで頂けるので
地域や人との繋がりが生まれた

イメージだけでなく、現地に行き実際に
関わり合いを持つことで発見がある

地域の人々は外部の意見も求めており、
自分の意見を発信していくことも大事

→現地へ足を運んでみる
→意見交換を積極的に行う

安芸太田町　井仁地域報告資料



インターンシップ概要

○2015年　インターンシップ

- ２０１５年８月３１日（月）～９月４日（金）（４泊５日）
- 宿泊場所：井仁棚田交流館（旧小学校）
- 参加人数：6名（男性5名、女性1名）の1～2年生
- 活動内容：水路掃除、草刈り、枝打ち、ワークショップなど

○インターンシップ日程表

	31日（月）	1日（火）	２日（水）	３日（木）	４日（金）
朝食（各自）					
午前	広島大学出発	枝打ち	水路掃除	水路掃除	ホンモロコ養殖池の清掃体験
昼食	地域の人と地元弁当を食べながらオリエンテーション				
午後	オリエンテーション（地域の概要、作業の必要性・目的） 棚田散策・説明 水路掃除	枝打ち	猪柵の草取り	ワークショップ（井仁地区を中心とした安芸太田町の魅力発見、新製品の開発等） 交流会	インターンシップ終了
入浴＆夕食　グリーンスパ熊賀					

インターンシップの様子

水路掃除

インターンシップの様子

いのしし柵の草取り

インターンシップの様子

ともに汗を流すことによって理解が深まった

はじめてのインターンシップが終わって

○2015年のインターンシップを振り返ると…

課題

- 初めての受け入れのため、内容の検討について難航した
- 作業内容が偏ってしまい、学生の思いと違う部分があった
  （米作りに直接関わる作業がなかったため、作業内容の重要性が伝えきれなかった）
- 指導する地域の方が同じ人になり、負担が集中してしまった
  （農作業が中心だったので、地域の方に偏りが出てしまった）

成果

- 井仁の棚田へ愛着を持ってくれる学生が生まれ、地域行事に参加や企画に加わる学生ができた

⬇

若者の力による地域活性化

安芸太田町　井仁地域報告資料

はじめてのインターンシップが終わって

学生が企画・参加（7月・12月）

はじめてのインターンシップが終わって

地域の人の参加増え、賑やかに

インターンシップ概要

○2016年　インターンシップ

- ２０１６年9月１２日（月）～9月１７日（土）（５泊６日）
  - ⇒受け入れ時期を稲刈りシーズンに変更
- 宿泊場所：井仁棚田交流館（旧小学校）
- 参加人数：4名（男性1名、女性3名）
- 活動内容：草刈り、稲刈り、高齢者の困りごと解決、古民具整理、野草を学ぶ会など
  - ⇒地域の負担減のため、地域外の協力や少人数での指導に

○インターンシップ日程表

	12日（月）	13日（火）	14日（水）	15日（木）	16日（金）	17日（土）
朝食（各自）						
午前	広島大学出発	木工品作り体験	草刈り	稲刈り	野草を学ぶ会	ワークショップ
昼食	地元弁当を食べながらオリエンテーション					
午後	オリエンテーション（地域の概要、作業の必要性・目的） 棚田散策・説明	障子の張替え お手伝い	民具室の整理	稲刈り	特産品つくり & 交流会	インターンシップ終了
入浴＆夕食　グリーンスパ筒賀						

インターンシップの様子

井仁の様々な人たちと作業や手伝いを行った

インターンシップの様子

今後の活動をサポートしてくれる人材を

最後に

1．農水関係の学生に、地域の何を学んで欲しいか

- 地域を知って、別の生き方を参考に
- 自然の中で生きていく術
- 支えあいの精神

2　中山間地域・島しょ部社会に関心をもつ学生に扱ってほしい地域課題や卒論

- 地域の拠点（井仁棚田交流館）の活用について
  ⇒観光や雇用などの地域活性化ができる拠点の事例や提案
- 棚田における高齢化に伴う、農業の省力化（スマート農業）

世羅町　報告資料

広島大学　地（知）の拠点中山間地域・島しょ部領域
第3回円卓フォーラム

連携市町からの視点から

～地方創生活動における大学との連携の意義～

１．インターンシップ事業

実施期間：2016年９月５日（月）
～９日（金）
受入団体：世羅高原６次産業推進協議会

2016年９月５日（月）
１日目（開校式・オリエンテーション）

2016年9月6日（火）
2日目（法人にて実習）

世羅町　報告資料

2016年９月７日（水）
３日目（収穫体験・町内施設見学）

2016年９月８日（木）
４日目（サンプリング調査）

2016年９月９日（金）
５日目（ワークショップ・閉校式）

三次市　報告資料

広島大学　地（知）の拠点中山間地域・島しょ部領域　第３回円卓フォーラム

《連携市町の視点から》
地方創生活動における大学との連携の意義

三次市政策部企画調整課
主任主事　杉谷幸浩

1　第３回円卓フォーラムH29.1.19

三次市について

◇主な観光資源・特産品

- 霧の海
- 鵜飼
- ブッポウソウ
- ピオーネ
- アスパラガス
- 広島三次ワイナリー
- トレッタみよし
- 奥田元宋・小由女美術館

2　第３回円卓フォーラムH29.1.19

地（知）の拠点事業の取組

◇「布野町」について

- 三次市北部・島根県との県境
- 冷涼な気候で，冬場の積雪も多い。
- 人口は約1,500人
- 農業従事者が多い。
- 「道の駅ゆめランド布野」を拠点として，地域内で生産された農産物や加工品の販売，観光情報の発信など，地域活性化に取り組んでいる。

「道の駅ゆめランド布野」

◇「布野町」がかかえる課題

- 少子高齢化・農業の担い手不足
- 「中国やまなみ街道」の開通により，布野町の主要道路である国道５４号の交通量が激減　など

3　第３回円卓フォーラムH29.1.19

地（知）の拠点事業の取組

◇教養ゼミ（平成２６年～平成２８年）

道の駅 廣田社長による講義

大前農園 アスパラ収穫体験

河川清掃

江の川漁協による投網体験

ふるさと惣菜バイキング（昼食）

道の駅 アイス手づくり体験

4　第３回円卓フォーラムH29.1.19

地（知）の拠点事業の取組

◇インターンシップ（平成２７年・平成２８年）

「道の駅ゆめランド布野」を中心に実施

- 内　　容：農業実習，店舗・レストラン運営補助，各種イベント補助ほか
- 受入期間：約１週間
- 受入人数：毎年３人ずつ

平成２７年８月２８日（中國新聞）

平成２８年９月１日（中國新聞）

5　第３回円卓フォーラムH29.1.19

『酒粕アイス』の共同研究

◇きっかけ

- 平成２７年度，教養ゼミで布野を訪れた「船戸ゼミ」の学生達から，布野町の特産品でもある**アイスの共同研究の提案を受ける**。
- 微生物が専門である船戸先生の影響もあり，**「酵母」**を使ったアイスを研究する方針を決めた。
- ちょうどその頃，道の駅ゆめランド布野では，施設に隣接する圃場で育てた**「アイガモ米」を使った地酒**を，生産・販売することとなっていた。また，隣の作木町には，**「わかたの酒」**という銘柄の地酒がある。
- そこで，平成２８年２月，酒づくりにおける副産物である**「酒粕」を使ったアイスを作ることを決定した**。

6　第３回円卓フォーラムH29.1.19

三次市　報告資料

『酒粕アイス』の共同研究

酒粕アイス試作会

味を比較・評価（試作会にて）

キャラクター選考

三次市長（右側）に進呈

酒粕アイスお披露目会

商品名「オリゼさんのアイ酒」

『酒粕アイス』の共同研究

◇『オリゼさん』

- 「オリゼ」というキャラクター名は，日本酒の麹菌の学名に由来
- 生物生産学部の２年生が考案

商品パッケージに「オリゼさん」

『酒粕アイス』の共同研究

◇販売の状況

- 道の駅ゆめランド布野，広島大学内売店，広島大学病院内売店にて販売中
- 販売開始から５ヶ月で，約３，７００個販売

道の駅でＰＲ活動

◇共同研究の成果

- 道の駅や広島大学のＰＲ効果
- 商品販売による経済効果
- 学生の学びの場として

広大生協でＰＲ活動

大学との連携を通じて

- 学生の中山間地域への理解の深まりを実感
  ⇒学生に「三次市」という地域を知ってもらう事が目的のひとつ

- 地域体験型から課題解決型へ
  ⇒「酒粕アイス」はその事例のひとつ

- 一時的なものとならないように
  ⇒「三次市」を見つけたら思い出して
  ⇒再度，三次市を訪れてほしい

学生のみなさまへ

- 中山間地域に興味を持ってほしい
  ⇒都市部とは違う面白さ・難しさ
- 学生の立場でできることは何か？
  ⇒大学での研究テーマに「中山間地域」を
  例：新農業モデル，鳥獣被害対策　など
- 将来，社会人としてできることは何か？
  ⇒社会人として中山間地域に関わり続ける
  例：三次市役所の職員，道の駅の社員，農業の担い手，起業　など

ご清聴ありがとうございました。

広島大学生物生産学部
地(知)の拠点大学による地方創生推進事業

お問い合わせ先

広島大学 生物圏科学研究科　地域連携室

739-8528 東広島市鏡山1-4-4

TEL　082-424-7905　FAX　082-424-2037

mail　chinokyo@hiroshima-u.ac.jp

http://www.hiroshima-u.ac.jp/seisei/coc/

http://hirodaicoc.hiroshima-u.ac.jp/chiikitaisaku/